

# 算数科少人数指導における授業改善

～個のつまずきに応じた適切な指導の在り方～

多治見市立養正小学校 塚本 浩二

## 1 授業改善の視点

構造的な板書

## 2 実践

### (1) 課題設定の場面の板書の工夫

4年生算数科「整数のわり算」の単元で、三位数÷一位数の計算で商が二位数になる場合の計算の仕方を考える授業である。ここでは、商の百の位の数を除数よりも小さい場合、百の位に商の数をたてることなく、百の位に十の位の数合わせた2けたの数と見て計算する方法について学習した。本時に扱ったのは $347 \div 5$ の筆算で、この場合 $3 \div 5$ ができないので、 $34 \div 5$ として計算するのである。この問題を解き始めたほとんどの児童は、商を069とした。これは、児童は前時までに、必ず商をたてることを学習してきたためである。商が069となることを問題とし、「百の位に商がたてられないときの筆算の仕方を考えよう」と課題を立て、板書に位置付けることで、この問題を解決しようとする強い課題意識をもたせることができるようにした。

強い課題意識

課題化

既習学習を活かし、ほとんどの児童が商を069とした。

### (2) 追究の場面の板書の工夫

筆算の仕方が定着していない児童や引き算を間

違える児童に対しては、「たてる→かける→ひく→おろす」というように計算の仕方をパターン化して示し、正しく計算できるよう指導した。さらに本時は百の位に商がたたない計算なので、 $3 \div 5$ ではなく $34 \div 5$ で計算し、商の6を十の位にたてることを明確に捉えられるよう34を囲み、一つの数として見られるようにした。

計算の仕方をパターン化して示したことで、正しく計算することができるようになった。また、 $347$ の $34$ の部分をついで示したことで、百の位ではなく十の位に商をたてることを理解させることができた。

「たてる→かける→ひく→おろす」と計算の仕方をパターン化した。

3÷5ではなく34÷5で計算する。

## 3 実践を振り返って

### <成果>

- 既習の学習内容を取り上げて板書に位置付けることで、強い課題意識をもたせることができた。
- 計算の仕方をパターン化して示したことで、正しく計算することができるようになった。
- 三位数の百の位と十の位をついで示したことで、百の位ではなく十の位に商をたてることを理解させることができた。

### <課題>

- 今後も児童に見やすい板書を心がけ、課題からまとめに至る一連の学習過程が明確に表れ、児童の理解を助ける板書となるように、さらに工夫したい。